

## 「目に見える神として」

ヨハネによる福音書 1:14-18

イザヤ書 7:14

2025年12月21日

野村 友美 師

### <寂しい私たち>

クリスマスおめでとうございます。

さて、みなさんは「クリぼっち」という言葉を聞いたことはあるでしょうか？

クリスマスを一人ぼっちで過ごす人、という意味だそうです。あっちでもこっちでも、周りはみんな友だちや恋人や家族と一緒にクリスマスを楽しんでいる。そんな中で自分はポツンと一人ぼっち、という何とも切ない寂しさを、自虐的に笑い飛ばそうとする言葉が「クリぼっち」なのでしょう。10年ぐらい前から言われ始めて、今ではわりと当たり前に使われている言葉です。

考えてみると、教会のクリスマス礼拝は一人でも誰かと一緒でも、関係なしに参加してみんなでお祝いできますから、クリぼっちからはいちばん遠いかもしれませんね。24日のキャンドルサービスにも、ぜひ皆さんお越しください。

クリスマスに限らず、「寂しい」という気持ちは私たち人間にとって、とても扱いづらくて、けっこうダメージが大きいものです。

他の誰かと繋がっていない、関わりが薄い、と感じる寂しさ。誰にも自分の気持ちを知ってもらえない、わかってもらえない寂しさ。そんな「一人ぼっち」の寂しさを、私たち人間は多かれ

少なかれ、誰もが抱えて生きているように思います。

たとえ周りに人がいたとしても、それで寂しくならないとは限らないでしょう。もしかしたら、誰かと一緒にいるのに感じる寂しさの方がしんどいかもしれません。別に一人でも大丈夫、寂しいとは思わない、誰かというほうが疲れる、という方も中にはおられるでしょう。確かに、夢中になれる仕事とか趣味とか、「これさえあれば一人でも平気だ」と思わせてくれるものは、結構たくさんあります。

それでも、ずっと孤独で居続けるのは、じわじわと私たちの心を蝕むものです。他の誰かと関わること、誰かが自分を受け入れてくれること、誰かに理解してもらえることを、私たち人間はどこかで求めてしまいます。そういう性質を持っているから、人は人と関わり合って、社会を作って生きているんです。

とはいえ、私たちの寂しさを、いつでも完全に満たし続けてくれるものは、この社会のどこにもありません。人はみんなそれぞれに違ってきますから、誰かを隅から隅まで理解することも、すべてを完全に受け入れることも、誰にもできません。どれだけお互いを大事に思い合っている、血が繋がった家族の間でさえも、無理なものはやっぱり無理です。それは、ほとんどの人が経験として知っていて、分かっていることでしょう。だからある程度のところで諦めて、それぞれの「一人ぼっち」の寂しさを、それぞれのやり方で受け止めているのではない

でしょうか。でもやっぱり、どこか諦めきれないでいるのが、私たち人間のどうしようもない弱さとも可愛らしさとも呼べるころだと思います。

#### <クリスマスの出来事>

そう、人見知りだとか社交的だとかそれぞれに差はありますが、人はどこかで他人と繋がらずにはいられません。誰かの存在を自分のそばに感じて、お互いを認めあえることに、私たちは深い喜びを覚えます。だから逆に、それが足りないと感じる寂しさは、私たちの心をいろんな形で蝕んでしまうものでしょう。

「この人なら分かってくれるかも」と思う相手に、必死でしがみついたり。

「どうせ人は孤独なんだ」って、無理やり寂しさを押さえ込んでみたり。

今は SNS で「自分はこんなことができるよ」「こんなことをしているよ」「こんなこと考えてるよ」と、いろんな人に発信できる手段が増えました。ですから、けっこう気軽に他の人と関わったり繋がったりできる世の中だと思います。

だからといって、昔に比べて寂しい人が減ったかという、そうとも言えません。気軽に繋がれる関係が広がった分だけ、私たちの「寂しい」「認めてほしい」「わかってほしい」も、やっぱり同じように広がって大きくなっている気がします。

一人ぼっちは寂しい。

誰かと繋がっていても寂しい。

そんなどうしようもない寂しさを抱える私たちすべての人に、「あなたを一人ぼっちにはしない。わたしがあなたと一緒にいる！」と呼びかける言葉。

神様の愛を伝える言葉として、イエス・キリストはお生まれになりました。

寂しい私たち、すべての人の暗闇を明るく照らす光として、神様の独り子が私たちの世界にやって来られたんです。イエス様が生まれるざっくり700年～800年ぐらい前に、旧約聖書の預言者イザヤがこんな言葉で救い主の誕生を予告しました。

「見よ、おとめが身ごもって、  
男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」

(イザヤ7:14)

インマヌエル。

この言葉は「神が我々と共におられる」という意味である、と新約聖書のマタイによる福音書が説明しています。

「神様が私たちと一緒にいる」と証明するために、その子どもは生まれてくる。他でもない神様からそう予告されて、イエス様はお生まれになったんです。

「神様が私たちと一緒に居る」って簡単に言いますが、よく考えると結構すごいことですね。

神様は天と地、そしてそこに住む生き物、つまりこの世界のすべてをお造りになった、と聖書はまず最初に伝えています。

私たちが住んでいるこの地球という星だけじゃなくて、私たちがまだまだ知り尽くせない宇宙の全部を作られた神様が、その中の小さな小さな人間たちのところにやって来られた。

神様が私たちと同じように、泣いたり笑ったり、喜んだり怒ったり、食べたり飲んだり、働いたり、疲れて眠くなったり、嬉しかったり寂しかったりする、ひとりの人間になられた。

インマヌエル。

「神が我々と共におられる」というイエス・キリストの呼び名は、私たちにこのびっくりするような事実を伝えているんです。

今日一緒に読みましたヨハネによる福音書の中に、「独り子」という言葉が2回出てきました。この「独り子」という言葉は、元々のギリシャ語では「独特の」とか「独自の」という意味を持っています。

つまり、神様の独特さ、神様独自の性質を持つ存在として、イエス・キリストは私たち人間の真ただ中にお生まれになった、ということです。

イエス・キリストという御方を見れば、神様の独特さ、神様の性質がわかる。このことを、ヨハネの福音書は「独り子」という言葉で表現しているんです。

神様の性質を私たちに見せてくれる神様の独り子は、まず生まれてきた状況からしてものすごく独特でした。

古代の地中海地方の、小さな国の田舎町ナザレ。そこでささやかに生きていた、地位も権力も財産も何もないごく普通のカップルのところに、一人では何にもできない人間の赤ちゃんとして、イエス様は生まれました。

生まれた場所は旅先の家畜小屋でしたから、どんなに貧しい人でも、身分の低い人でも、外国から来た人たちでも、イエス様に会いに行きました。

宇宙を造った神様からすれば、本当に小さくて弱々しい人間たちの、その中でも特に小さくて弱いところから、イエス様の人生は始まったんです。どんなに小さくて弱い立場に置かれた人にも、寄り添うことができるように。どんな状況の人でも、神様の独り子に会えるように。

<目に見える神として>

まさに目に見える神として、イエス・キリストはこの世界にやって来られました。

私たちすべての人のいちばん小さくて弱いところに、神様が寄り添ってくださった出来事。

神様の方から私たち人間に歩み寄って、どんな状況の人にも出会って、「あなたと一緒にいるよ」と語りかけて、抱きしめるためにやって来られた出来事。

それが、このクリスマスという日に私たちがお祝いしている出来事なんです。

ところで、ちょっと考えてみましょう。

「あなたのことは全部知っているし、わかっているよ、いつでもどこでも一緒にいるよ」って神様から言われたら、どう感じますか？

確かに寂しくはありませんよね。

寂しくはないでしょうけど、何のためらいもなく「やった！嬉しい！」と思える人は、どのくらいいらっしゃるでしょうか。

正直なところ、「全部知っているよ、いつでも一緒にいるよ」と神様から言われていると思うと、私はちょっとドキドキして、冷や汗も出そうです。

神様、全部じゃなくていいです、と思わず言っ  
てしまいそうになります。

「神様、今だけは私から離れていてくれませんか」と頼みたくなる時もあります。

それは多分、私だけじゃないでしょう。

神様に知られたら恥ずかしいと思うことや、  
神様から隠れてしまいたくなる時が、きっと  
誰にでもあるだろうと思います。

全部知られてしまったら、照れくさいだけじゃ  
なくて、ちょっと後ろめたい。そういう気持ちを、  
多くの人が神様に対して感じるんじゃないで  
しょうか。

寂しいのは辛いくせに、私たちは「一緒に居る  
よ」と言ってくださる神様を、100パーセントは  
歓迎しきれません。それでも、なんです。

「それでもあなたを独りにほしくない。わたしが  
一緒にいる」と言い切るために。

神様の性質を伝える独り子、イエス・キリスト  
は人間になって、私たちのこの世界に飛び込ん  
で来られました。

私たちが神様に知られたら恥ずかしくて、後  
ろ暗いこと。神様に怒られて嫌われて、罰を受  
けたとしても仕方がないこと。そんな私たち人  
間の罪が無視されて、なかったことになった訳  
じゃありません。その罪が私たち自身にもたら  
すはずの苦しさや悲しさや、悔しさや寂しさ、痛  
みや辛さを、 ぜんぶ味わって、すべての人の  
罪を背負って、イエス・キリストは十字架で死な  
れました。

その上で、死からよみがえったイエス様は、私  
たち一人ひとりに、すべての人に向かって、救  
いの手を差し出されました。

「わたしはあなたを独りにほしくない、いつだって

あなたと一緒にいる。」そう言って、神様の  
独り子は今も一人ひとりに、呼びかけ続け  
ておられるんです。

私たちがこの地上で生きる人生の最後ま  
で、そしてその先も。

「わたしがあなたと一緒にいる」と呼びか  
けて、手を伸ばして、私たちがその手を握り  
返すのを待っている神様がおられます。こ  
のことを、私たちにいちばんわかりやすい  
形で伝えるために、神様の独り子は私たち  
が生きるこの世界にお生まれになりました。

どんなに恥ずかしいことや、後ろめたいこ  
とを抱えていても、「あなたを独りにほしな  
い、わたしが一緒にいる」と伝えて抱きしめ  
るために。

神様はイエス・キリストという形をした手を、  
すべての人に差し出しておられるんです。

この神様の手を握り返すのに必要なこと  
は、たったひとつだけです。

神様の性質を私たちに見せてくださった  
独り子、イエス・キリストによってあらわされ  
た神様からの愛を信じて、受け入れる決断  
をすることだけです。

クリスマスをお祝いするこの朝、ここにお  
られる一人ひとりが、差し出された神様の  
手をぎゅっと握り返せますように。

「あなたを独りにほしくない、わたしが一緒  
にいる」と呼びかけておられる神様に応え  
て、それぞれの人生の旅路を、神様と共に  
歩いていかれますように。

お祈りいたしましょう。